CHIHOUKISHI HANS NO JYUNAN

地方騎士ハンスの受難

AMARA
アマラ

主な登場人物
Main Characters
レイン
ハンスを異常なまでに慕う元部下の女騎士。普段は仮面のような無表情だが、実際は感情の浮き沈みが激しい。
コウシロウ
四人目の日本人。元極道にして千里眼の能力を持つ料理人。静岡県出身。
ケンイチ
一人目の日本人。農業高校出身で、凶悪な魔獣を手懐ける能力を持つ、粋なリーゼント男。北海道出身。
ハンス
本編の主人公。都では〝魔術師殺し〟の異名を誇る凄腕騎士団長だったが、貴族間での政争に背を向け、自ら辺境の地方騎士に志願する。
ミツバ
三人目の日本人。外見は可愛らしい美少女だが、大食い&怪力が自慢のトラブルメーカー。島根県出身。
キョウジ
二人目の日本人。オタクで気弱な性格の高校生だが、どんな怪我でも回復させる魔法が使える。東京都出身。

1　一番目と二番目の男

辺境と呼ばれる地方の、小さな街。

周囲には隣国との国境である山脈が連なり、森と畑ぐらいしかないその街に、一人の騎士が住んでいた。

意志の強そうな目に、後ろに向けて撫で付けられた金色の髪。美形と言って差し支えない顔つき。そんな容姿もあって、街を守る騎士として人々からの人望も厚い。

もっとも、その実「騎士」とは名ばかりで、揉(も)めごとが起これば仲裁し、事件が起これば解決する、警察と裁判官と文官を一緒にした、いわば地方公務員のような存在だ。

実際、街ではたいした揉めごとも事件も起こらない。何かあるとすれば時折魔獣(まじゅう)が出没する土地を見回るぐらいであり、都会勤めの騎士達から馬鹿にされても仕方のない仕事内容であった。

それでもその騎士、ハンス・スエラーは、けっして人に羨(うらや)ましがられることのないこの地味な仕事に、誇りと喜びを感じていた。

そんな、ある日のこと。

「ハンスさん！　大変じゃぁ！」

ハンスの詰める駐在所に、市場を取り仕切っている老人が飛び込んで来た。
駐在所は街にある唯一の公共施設なのだが、その実態はブロックを積み上げただけのボロ屋だ。
固めた地面に直接置かれたオンボロな執務机が一台あるきりで、寝るスペースすらない。そのため、ハンスはこの街に一つしかない宿屋で寝泊りをし、朝になると駐在所に出勤するという日々を送っていた。
執務机に向かっていつものように書類を書いていたハンスは、飛び込んで来た老人のあまりに切迫した様子に顔を上げる。
「どうしたんですか、そんなに慌てて」
「そ、それがその、なんとも説明しにくいんじゃが、見てもらったほうが早いとは思うんじゃけども……一言で言うとなんというか、生きた魔獣を市場で売っておる男がいるんじゃ！」
「はぁっ!?」
老人の言葉に、ハンスは顔を顰めた。
魔獣を売り買いするというのは、まあ、ないことではない。普通の動物よりも強力な魔獣は、扱い方次第では非常に役に立つからだ。とはいえ、魔獣はたいていが凶暴で、かつ様々な能力を持っている。そんなものを生きた状態で売り買いするなど、こんな田舎の街では滅多に有ることではない。
大きな街の剣闘場であれば話は別だろうが、逆に言えば、そのような特殊な生業の人々にしか需要はないのだ。
老人の説明だけを聞いても意味がわからないと判断したハンスは、早速現場に向かってみることにした。

件の市場につくと、そこには異様な光景が広がっていた。
頭に一本の角と、下顎に巨大な牙を生やした猪型の魔獣「チャージボア」が、前足と後足をツタで縛られて地面に転がっているのだ。
それも一匹や二匹ではない。総計二十匹ほどはいるだろうか。
その前には、奇妙な格好の男が座っていた。
整髪料か何かでガッチリと髪を固めているらしく、前髪が妙な具合に前方へ突き出ている。髪も目も真っ黒で、どちらもこの国では珍しい。ズボンと上着が一体になったような服装も、ハンスには見たこともないものだった。
その男は両手に板切れを抱えていた。そこにはこんな文字が見えた。
『いのしし　うります』
周囲に群がる人々は、かなり警戒して男を遠巻きに眺めている。普通ならいたたまれない気分になりそうなものだが、男の方は全く気にした様子がない。
呆気にとられていたハンスだったが、意をけっして男に近付き声をかけた。

「あの、君」
「あ、いらっしゃい。イノシシどっすか？　めっちゃ新鮮っすよ」
「うん。新鮮、っていうか、生きてるっていうか。いや、それ以前に君、これイノシシに見えるの？」
確かに、チャージボアは猪型の魔獣だ。体長が四メートルを超えていて、牙の長さは一メートルほどありはするが……。
ハンスに指摘されて、男はチャージボアを振り返った。
「ええ!?　コイツ、イノシシじゃねぇんすか？　そういえば、すんげぇ牙生えてんなぁ」
「そうだな」
ハンスは頭を抱えそうになった。とにかく、この男をどうにしかなければならないと、ハンスの頭の中で激しく警鐘が鳴り響く。なんにしても、まずは男の身元を確かめなくてはならない。
「まあ、ここは自由市だから、何を売ってもいいんだけどね。君、何処から来たの？」
「はあ。なんつーか、良くわかんないんすけどね？」
男の話は、要約すると次のようなものだった。
酪農を営んでいる実家で手伝いをしていたら、いつの間にか知らない山の中にいた。
仕方がないのでふらついていると、この猪達に襲われた。死ぬかと思ったが、「のうぎょうこうこう」という場所で得た知識が役に立ち、猪達を生け捕りにすることに成功。

それを担いで歩いているうちに村を発見。猪は邪魔だったので、ひとまず村の外の林に転がしておいた。
村人に道を尋ねてみたところ、どうもここが自分の知っている土地とは違う場所だとわかった。途方に暮れている男に、農家の人達が食べ物を分けてくれ、折角だから捕まえたという猪を街で売ってみたらどうか、と提案してくれたのだという。
「いや、マジあの村の人達には感謝っすわ。俺、あそこに行かなかったら確実に死んでたっすもん」
あっけらかんと笑う男に、ハンスは頭痛がした。村にその猪を担いで入らなかったのは、不幸中の幸いだろう。もしそのまま入っていたら、大混乱が起きていたはずだ。
「そうか。つまり、君は迷い人なんだな」
「はぁ。まあ、迷子っすね」
「折角やんわり表現したのに。まあ、いいだろう。とりあえず、このチャージボアは危険なんだ。解体するか何かして欲しいのだが」
「ほんとすんませんっした！　解体できる場所かなんか、貸してもらえるとありがたいんすけど」
ハンスは少し考えると、思い立ったように一つ頷いた。
「そうだなぁ。駐在所の裏を使っていいぞ。あそこなら井戸もあるし」
「マジすか！　有難うございます！　じゃあ、早速運ぶんで、場所教えてもらえますか！」

男はやおら立ち上がり、チャージボアの方へ歩き出した。そういえば、この男はどうやってこれらを運んで来たのだろうか。

ハンスは男の様子をしばらく見守り、目をむいた。

男は両手両肩を使い、チャージボアを持ち上げると、合計四匹を軽々と担ぎ上げたのだ。

「でっけーんで、ちょっとずつはこぶしかねぇーんすよ」

「あ、うん。そうね」

ぎりぎりでそう答えることができたハンスの精神力は、かなりのものであると言わざるを得ないだろう。

数時間後、男はチャージボアを解体して、無事市場で売り切った。

男曰く、こういった作業は「のうぎょうこうこう」で習っていたので得意なのだという。

肉を売り終わった後、ハンスは男にさらに詳しい事情聴取を行った。

男の話によると、彼は「にほん」という国から来たのだという。残念ながらハンスはその国名を聞いた覚えがなかったので、かなり離れた国だろうと伝えた。

少しの間うな垂れていたものの、すぐに気を取り直したように顔を上げた。そして、帰る目星がつくまで、この街で暮らしたいと言い出したのだ。

こういうとき手助けをするのも、ハンスの仕事である。

男はケンイチと名乗った。正確にはヨシダ・ケンイチというのだそうだが、当人はケンイチと呼んでほしいという。

早速ハンスは、ケンイチにできる仕事を探し始めた。最初に目を付けたのは、チャージボアを持ち上げたバカ力だ。それを活かして、力仕事をやればいいと考えたのである。だが、そう上手くはいかなかった。

片手で巨大な魔獣を持ち上げる怪力は、相手が魔獣でなければ発揮できないようなのだ。普段のケンイチの腕力は、村の力自慢程度でしかなかったのである。

どうしたものかと悩むハンスに、ケンイチは自分がやっていた仕事をやれないものだろうかと提案した。魔獣を家畜として育てられないか、というのだ。

この提案に、ハンスはなんとも言えない複雑な表情を浮かべた。魔獣と言えば、人間にとっては、大きな脅威である。それを人間の力でたやすくどうにかできるものだろうか。

だが、常識外のケンイチの力が有れば、できないものではないかもしれない。なにより、ケンイチ自身が「おそらくやれる」と強く主張しているのだ。

根拠はあるのか、と尋ねるハンスに、ケンイチはこう答えた。

「俺、自分のステータス見られるみたいなんすよ。それ見たらなんか、魔獣使いって書いてあんすよね！」

ステータスという言葉は、ハンスにも聞き覚えがあった。

ゲームなどで使う、能力を数値化したものを指す言葉のはずだ。
しかし、自分のステータスが目に見えるなどという話は聞いたことがない。
もしかしたら、ケンイチの脳は困った状態になっているのかもしれないと思ったハンスだったが、そういうこともあるのかもしれないと思い直した。そもそもケンイチの存在自体が、常識から外れたものなのだ。
ハンスは悩んだ末、人里離れた場所でなら、とケンイチの提案を許可した。

喜び勇んだケンイチは、街から二時間ほど離れた山の中で野宿しながら、一週間でそこを切り開いてしまった。
それから街の大工達に頼んで小屋を建てて貰うと、そこに住み込んで熱心に働き始めたのである。
毎日山や森を駆けずり回り、チャージボアや牛型の魔獣に加え、狼型の魔獣なども次々手懐けていく。そして数ヵ月後には、ほんとうに魔獣の牧場を作り上げたのである。
「いや、マジ最初に行った村と、街と、あとハンスさんのおかげっすよ！　皆に会わなかったら俺マジ今ごろ野垂れ死んでたっすよ！」
ハンスが巡回に行くたび、ケンイチは嬉しそうにそう話した。
（いや。別にお前一人でも生きてたと思うぞ）
そう思いながらも、けっしてそれは口にしないハンスであった。

ケンイチが牧場で牛型魔獣の乳とチーズ、チャージボアの生ハムを売り出してから、数ヵ月がたった。本人のがんばりもあり、ケンイチはすっかり地域に認められる存在となっている。
また、そんな、ある日――。
ハンスの駐在所に、血相を変えた村人が走りこんで来た。
「た、大変だハンスさん！　なんか凄い治療師の人が村に来てるんだ！」
尋常でないその様子に、ハンスが表情を引き締める。
「治療師？　魔法のほうのかい？」
「そうなんだ！」
この世界には、二種類の治療師がいた。一方は、薬の知識や外科手術の技術を持つ、いわゆる医者である。もう一方は、魔法の力で傷や病を癒す、回復魔法使いであった。
ただし、人体に直接作用を及ぼす魔法は高度であり、使える者は非常に少ない。そのため、大半が王都などの都会に住んでいるか、貴族に囲われたりしている。こんな辺境になど、滅多にいないのだ。
「なるほど。そりゃ珍しいなぁ」
「いや、それだけじゃないんですよ。ごく僅かなお金と食料だけで、治療をしてくれるんです！　そりゃあもう凄い人気で、家の爺さんも長年の腰痛が治ったって大喜びなんです！」

これはおかしいと、ハンスは眉を顰めた。魔法での治療は、その効果に比例してかなりの対価を要求されるのが常識である。一体、どういうことなのだろうか。

それを確かめるために、ハンスは早速現場へ足を向けた。

件の村に到着したハンスの目に飛び込んで来たのは、長い列を作る村人達の姿だった。その先頭にいるのは、奇妙な服を着た少年だ。

黒い上着に、黒いズボン。上着には金色に輝く凝った細工のボタンがついており、なかなか高級そうに見えた。

ただ、それを身に着けている当人は、実に地味な外見である。この国では珍しい黒髪黒目だが、それ以外は人ごみに紛れたら二度と見つけられそうにないほど特徴がない。

「君。君は治療師かな？」

「へ？　あ、き、き、騎士？　本物の騎士の人ですか？　やっぱりもうここは日本じゃないんだ。そして、地球でもないんだ……もーだめだぁああ!!」

「え、なにが？」

いきなり泣き崩れ、地面に突っ伏す少年。ハンスは困惑しながらも、今は話ができる状態ではないと判断し、周りにいた人達に事情を聞くことにした。

なんでも、少年は突然山の中から現れたのだという。そして、今と同じように地面に突っ伏してひとしきり泣き喚いた後、何かを吹っ切ったように近くにいた村人達を魔法で治療し始めたのだそうだ。

驚く村人達に、少年はこう言った。

「僕は怪我や病が治せるようなんです。その代わりといってはあれなんですが、よければ食べ物を分けてくれませんか？」

回復魔法と言えば、貴族や戦争のためのものというのがこの国での常識だ。

その見返りが食べ物だけでよいのならと、村人達は大いに喜んだのだった。

「んで、ほかにも治療を受けたい人がいたら、何人でも治すって言うんだ。お礼は何でもいいからって。そしたらまあ、この有様だよ」

村人は、少年の周りを指差した。沢山の人だかりと、お礼の品々が堆く積まれている。ハンスは頷いた後、再び少年の近くへ歩み寄った。

「なあ、君。君は『にほん』から来たのか？　もしかして、『のうぎょうこうこう』という言葉を知っているんじゃないかな？」

その問いかけに、少年は弾かれたように顔を上げた。凄まじい勢いで這い寄ると、ハンスの体にしがみつく。

「その言葉をどこで!?　僕以外にも日本から来た人がいるんですか！　会わせてください！　どこにいるのか教えてくらあいぃいい！」

「わかった！　おちつけ！　わかったから！」
涙と鼻水を垂れ流しながら叫ぶ少年を何とか引き剥がし、ハンスは少年を同じ日本から来たという、ケンイチのところへ案内した。
少年を見たケンイチは、驚いたように声を上げる。
「あんだ。学ランじゃねぇの。この辺にもあんだなぁ」
「ガク……、ぼ、僕はこの辺の人間じゃないんです！　地球の、その、日本から来たんです!!」
「ああ？　そうなんだべか？　俺はアレだ、北海道の方にいたんだけどよぉ。アンタどの辺だ？」
「僕はその、と、と、東京の……う、うわぁあああああ!!」
話している内に、何かが込み上がって来たらしく、再び泣き崩れる少年。その勢いに、ハンスもケンイチもぎょっとして一歩後ずさった。
「なん、ハンスさん、どうしたんすかコイツ」
「いや。山の中から出て来たとかでな。『にほん』から来たというから、おそらくケンイチと同じ場所なんじゃないかと思うんだが」
「ナルホド。たぶん同じ国っすよ。俺以外にもいたんすねぇ。帰りかた知ってっかな、コイツ」
とりあえず少年の気を落ち着かせようと、ケンイチは牛型魔獣の乳を振る舞った。
「あ、ありがとうございます……」
「で、君は『にほん』から来たということで、間違いないんだね？」

「はい。ここからすごく遠い……っていうかたぶん、異世界にある国です」
「「いせかい？」」
スドウ・キョウジと名乗った少年の言葉に、ハンスとケンイチは首を傾げた。
「異世界って。マジでか。またトッピョウシもねぇこと言うなぁ」
「突拍子もないって。逆に聞きますけど、角が生えたイノシシとか、六本足の牛とか、地球にいるんですか」
「……あ、いねぇ」
「気がつくのおそっ！」
キョウジの話をまとめると、どうも二人は違う世界から迷い込んで来てしまったらしい。
「そーいえば、この辺り電話ねぇなぁと思ってたんだけど。いっくら田舎でもテレビねぇのもアレだよな言われてみりゃぁ」
「だから気がつくのおそっ！」
「うーん。君達の力を考えれば、有り得ないとも言い切れないが……」
ハンスは二人の会話に、唸りながら腕を組んだ。普通であれば、異世界から来たなどお笑い種だろう。だが、ケンイチの能力を考えればどうだろうか。魔獣だけに効果を発揮するような力など、聞いたことがない。キョウジにしても、とても回復魔法が使えるようには見えなかった。
回復魔法というのは、何年も厳しい修業を積み、さらにその中でも、特に人体に対する深い知識

や経験を得たごく一部の魔法使いだけが会得できる秘術なのだ。
　とてもではないが、キョウジにそんな知識や経験があるようには見えない。村で使っていた回復魔法を見る限り、それこそ「異世界から来た」という方が納得できる。
　ハンスがそれらを説明すると、キョウジは絶望したような表情で机に突っ伏した。
「やっぱり駄目なんだ……ここは地球じゃないんだ……もう元の世界には帰れないんだ……」
「まあ、しゃーねぇーよ。死んでねぇだけいいじゃねぇの」
「確かに、そうかもしれませんけど……」
「お前もあれだべ？　最初に行った村で、飯食わしてもらったりしたろ？」
「は、はい。すごく助かりました。死ぬかと思ってましたし。もしかして、ケンイチさんもですか？」
「おお。まあ、だから何かお礼しねぇーとなぁと思って、牧場やったり何やったりな。もうあれだ、特にハンスさんには、俺ぁ頭上がんねぇーからよぉ。この牧場だって、いろいろ手伝ってくれたり、万が一のためにって泊り込みで魔獣見張ってくれたりしてな。卸す場所も話を付けてくれたりよぉ。村の衆にも、街の衆にも。借りを返すつもりが、また借りになってってなぁ」
　しみじみと語るケンイチに、ハンスは照れ隠しなのか顔をしかめた。
　ケンイチの言葉を聞くうち、キョウジの表情が徐々に真剣なものへ変わっていく。
「そうですよね。いきなり山から下りて来た得体の知れない僕に、ごはんをくれたんですよね、村の人達……。帰れないなら帰れないで、お礼しなくちゃいけませんよね……」
「おお。一宿一飯の恩ってやつだべな」
「一宿はしてないですけど。そうですよね。日本人ですもんね。僕も」
「おお。そーだよな。日本人だもんな。困ったときに助けてもらったら、一生忘れんな、ってな」
　ハンスには良くわからなかったが、「日本人」というのは、そういう価値観を持っているものであるらしい。
　結局、キョウジはケンイチの牧場で暮らしながら、ハンスの巡回について回る形で治療師として働くことになった。
　僅かな対価で治療してくれるキョウジの存在は、まともな医者が近くに存在しないこの地方では、とても重宝がられた。それまで物知りな老人が作った煎じ薬や、行商人の持って来る高価なポーションなどに頼るしかなかったため、尚更である。立場上はケンイチの牧場に雇われている、獣医という扱いだった。しかし、実際はこの地方唯一の治療師であった。
「お礼をしようと行くたびに、ごはんをもらったりするんですよ。この間なんて、寒いだろうからって服まで貰って……僕、全然お礼できてないのに。こんなに良くしてもらったのなんて、初めてで。もう、なんて言っていいのか……」
　ハンスは牛型魔獣の乳を飲みながら号泣するキョウジを見て、「もしかしたらコイツは、乳で酔えるのかもしれない」と半ば本気で思ったのだった。

キョウジがやって来て、数ヵ月。
彼は、最近では医学書を読み漁る傍ら、村に伝わる薬草や煎じ薬などの研究をしていた。回復魔法に頼るだけではなく、何とか医者の技能も身につけようとしているらしい。治療師としての立場がものを言うのか、各村にある秘伝の薬とやらを教えてもらえるようになっていた。今ではオリジナルのポーションなども作れる。
二人とも、大分生活が安定してきていた。
ハンスの仕事もこれと言って変化もなく、のんびりとしたものだ。
またまた、そんな、ある日――。
血相を変えた村人が、ハンスの駐在所に飛び込んで来た。
「た、大変だハンスさん！　村に魔獣が下りて来て、えらい騒ぎになってたんだけど、山からすげぇ怪力な女の子が来て、退治してくれたんだよ！　なんか気がついたらこの辺にいたとか、自分は『にほん』って国から来たとか言っててさ！　こりゃハンスさんに来てもらわねぇとってことになったんだ！」
激しく嫌な予感がするハンスだったが、彼の仕事は街の治安を守ることである。
近くの壁に立てかけてあった剣を引っ掴むと、急いで駐在所を飛び出した。これらの出来事が、彼の身に降りかかる受難の、ほんの序章だとは、ハンス自身、全く予想もできぬことであった。

2　三番目の少女

ハンスは目の前で繰り広げられる奇妙な状況に、なんとも言えない表情のまま固まっていた。
それも仕方ないだろう。
三メートルを超えようかというオークが、年の頃は十二、三歳の少女からぼこぼこに殴られていたのだから。
髪と目の色は、案の定黒だ。髪は背中まで真っ直ぐ伸ばされており、一ヵ所だけ高い位置で横結びにされている。服装も独特だ。ダブッとしていながらも手首がきゅっと引き締まった長袖に半ズボン。特殊な布地で作られているのか、全体的に鮮やかな赤色をしており、妙につるつるとした質感をしていた。
「打つべし！　打つべし！　打つべし！　無駄ムダ無駄ムダむだムダァ!!」
「ご、ごめっ！　ごめんなっ！　ごめんなさいっ！　ゆるしてっ！」
オークは涙目になって謝り倒しているが、少女は一切聞く耳を持たない。容赦なく顔を張り飛ばし、時々胸や肩を乱打し続けている。そのあまりの的確な攻撃に、騎士であるハンスも戦慄を覚えた。

周りを見渡すと、そこはまさに阿鼻叫喚の地獄絵図といった有様である。少女に殴り倒されたであろうオークとゴブリンが、ぼろぼろになって倒れているのだ。合計で三十を超すそれらの魔物達が、うめき声を上げながらのた打ち回っている。そんな魔物達に、少女は嬉々とした表情で追い討ちをかけていた。それは、ハンスの中にある常識を完全に逸脱した光景であった。

「何が起こっているんだ……」

ハンスのそんな呟きをよそに、オークをぼこぼこに殴った少女はゆっくりと立ち上がり、拳を天へ突き上げた。その顔は、何やら大きなことを成し遂げた乙女の表情である。

「うぉおおお!!　自分の拳が真っ赤に燃えるっす！　敵を倒せと悶えて叫ぶっすー！　一！　二！　三！　ファイヤー!!」

もしここに日本人の徳の高い格闘オタクの方がいたとしたら、いろいろと突っ込みを入れるところだろう。だが、残念なことにそんな人はこの場にはいなかったのである。

この世界では、ゴブリンやオークは基本的に人種の一つとして考えられていた。といっても、奴隷人種とか、そんな認識である。

悪さをしなければ放っておかれるが、ときには奴隷狩りにあったりするのだ。

とはいえ、彼らは人間よりも力が強く、体も丈夫だ。ゴブリンにしてもオークにしても、その皮膚は新米の騎士であれば剣が通らないほど硬い。

そんな彼らをぼっこぼこに殴り倒した少女は、大方の予想どおり日本人であった。
「なんか日課のランニングしてたら、いつの間にか山にいたんすよ！　それからこの村に降りて来て、おじちゃんとおばちゃんにごはん食べさせてもらってたら、突然この人達が襲って来たんす！」
ハンスの「『にほんじん』か」という問いに、少女は「そうっす！」と元気良く答える。当たって欲しくなかったハンスの予想は、見事に的中した。
街には、すでに二人の日本人が迷い込んでいる。
一人は魔獣使いのケンイチ。もう一人は、回復魔法を自在に使いこなすキョウジだ。
二人とも何ヵ月もこの世界で暮らしており、すでに生活の基盤を築き上げていた。
どちらも突然山の中から現れ、厄介事を解決したり巻き起こしたりしているところを、ハンスに発見されている。そんな経験から、ハンスの中では「山から出て来た変な奴＝『にほんじん』」という方程式が完成していた。
とにかく日本人のことは日本人にということで、ハンスはケンイチが手懐けた魔鳥と呼ばれる鳥を使い、ケンイチとキョウジを呼び寄せた。
魔獣使いであるケンイチは、巨大な狼を馬代わりに使っているので移動速度が速い。こっちから行くよりも、呼んだ方が速かったりするのだ。

「おお？　いまどき赤ジャージか？　気合入ってんな」

狼型魔獣の背から降りたケンイチは、少女の服装を見て驚いたように声を上げた。
「僕の学校のジャージは真っ青でしたよ」
「おおう。それはそれで気合満点だな」
「ああ！　お二人は日本の方なんっすね！」
二人は少女に、とりあえずここが異世界であることを説明した。自分がぼこぼこにした相手を見ればわかるだろう、と。ちなみに、ゴブリンとオーク達は、縄で柱などに縛られていた。
「確かにあんなビジュアルの人達、オカルト特番でしか見たことないっす！　自分、一瞬アマゾンの謎の生物軍団に襲われたのかと思ったっす！」
「まあ。絶対にいないとも言い切れないかもしれないですけど……でも、なんにしても、こんなにわらわらはいないはずですよね？」
「そうっすよね！　うちの裏山でも見たことないっす！」
ミナギシ・ミツバと名乗った少女は、激しく首を縦に振った。
どうやら、ここが自分の暮らしていた国ではないと理解してくれたらしい。ケンイチとキョウジが跨って来た三メートルを超える狼を見れば、納得もできるだろう。
「ミツバの出身ってどこなん？」
「島根っす！　日本一どこにあるかわからない県っす！　でも鳥取には負けないっす！」
「おー。マジか。ガンバレな」

「うっすっ！」
「頑張るようなものなんですか？」
首を傾げるキョウジを、ケンイチとミツバはキッと睨みつける。
「キョウジ、おめぇー東京だからわっかんねぇーんだよ」
「地方自治体の戦いは苛烈っす!!」
「そ、そうなんだ……よくわかんないけど」
ハンスは、ひとまず日本出身組でしばらく話をさせることにした。
どことも知れない場所であろうとも、同郷の人間がいれば多少は安心するものだ。
それぞれの緊張が解けるまで、ハンスは彼らを放っておく。
「特産品もそんなにないし、目立つようなこともそんなにないっ！　その上あんまり知名度もないっす！　島根の怒りは有頂天っすよ！」
「そうだそうだ！　てめぇーら、もっと生なキャラメルかえっつの!!」
何を言っているのか良くわからなかったが、どうやらお国自慢になってきてるっぽかったので、ハンスはぼちぼち止めに入る。気絶していたゴブリンやオークが目を覚まし始めたからだ。
「それで、そろそろゴブリンとオークが攻めて来たときのことを聞きたいんだが」
「うっす！　自分、おじちゃんとおばちゃんに貰ったパンを食べてたんす！　そしたらこの人達が、山から雄叫びを上げて駆け下りて来たんすよ！　これはやばいなと思ったら、もう体が動いてたっす！」
「うん。女の子だからとか男だからとか抜きにして、今度から後先考えずに突っ込むのは止めようね、危ないから」
「うっす！　次からきちんと防具を着ていくっす！」
「ちがうっ！　しかし、よくゴブリンとオークに襲われて無事だったな。彼らも武器を持ってただろうに」
「え？　持ってなかったっすよ？」
「んん？」
ゴブリンやオークは、武器を扱う器用さを持った種族だ。武器もなしに村を襲撃するとは考えにくい。村人にも事情を聞いてみたのだが、これも妙な内容であった。山から突然ゴブリンとオークが雄叫びを上げてやって来たのだが、次の瞬間にはミツバが殴り倒していたというのだ。
ハンスの頭を、嫌な予感がよぎる。
いくら彼らが集団とはいえ、武器も持たずにやって来ることは、まず有り得ない。どのぐらい有り得ないかと言えば、たった一人素手で銀行強盗をするぐらいのものだ。
ちなみに、この世界にも銀行はあったりする。もちろん、ハンスが守るこの辺境の街には銀行など支店すらないわけだが。
とりあえず、比較的意識がはっきりしていそうなゴブリンを選び、事情を聞き出す。朦朧とした

様子でありながらも、そのゴブリンは何とか口を開いた。
その内容は、次のようなものである。
彼らは、「スカベンジャー」と呼ばれる者達であった。
狼などが倒した獲物の残りを失敬する、専門の群だ。
彼らがそういう生き方しかできないのは、皆怪我や病のせいで、元の群からはぐれた者達だからだ。健康な体ではないため、狩りを行えなかったのである。そのため仕方なく、食べ残った獲物を漁って生き残って来たという。
しかし、最近ではそれもできなくなってしまっていた。放置される獲物が減ってしまったのだ。理由はわからないが、有力な魔獣の群れが森からいなくなってしまったらしい。
それは、彼らの群にとって食べ物が手に入らなくなったに等しく、来る日も来る日も食べ物にありつけない日が続いた。
ほかの群を頼ったとしても、彼らは彼らで食うことに必死だ。よそに渡すほど食料などない。
今までは何とか木の実やキノコで食いつないで来たが、それも限界だった。そこで、人里に下り、食べ物を分けてもらえないか相談してみることにしたのである。
彼らゴブリンとオークは、人間に見つかれば奴隷にされてしまうかもしれない種族だ。襲うつもりになれば、食べ物の強奪も可能だろう。しかし、それは一時しのぎにすぎない。討伐隊でも組まれれば、あっという間に殺されてしまう。

もしかしたらそのまま捕まり、奴隷として売られてしまう危険もある。ゴブリンやオークとは、多くの人間にとってそういう対象なのだ。
そこで、全員で一斉に村に入ることにしたという。数さえ多ければ、どうにかなると考えたわけだ。ついでに、勢いをつけるための雄叫びも上げてみた。
「そしたら、いきなりそこの娘さんに殴りかかられたんです。俺達もすぐに、あ、これは襲撃とかに間違われたな、って思ったんですけど、すぐにわかってもらえると」
「そうそう。俺達、武器持ってないですし。丸腰ですし」
「でも、言い訳する隙もないぐらいの勢いで、その娘さんに俺達殴り倒されて……」
「一番体が大きいオークのゴナックさんがパンチ一発で宙を舞ったとき、ああ……、俺達殺されるんだ……と思いました」
むせび泣きながら、そう話すゴブリンとオーク達。
彼らの言葉を否定する要素は、ないと言っていいだろう。本人達の言葉どおり、彼らの体には古傷があったり、病気でやせ細っているように見える。ハンス自身、そういう者達が存在するのを知っていた。
むしろ被害者といった風情のゴブリンとオーク達を前に、街の衆とハンス、日本出身者達はなんとも言えない空気に包まれた。群のリーダーらしきゴブリンが、必死の表情で命乞いをする。
「奴隷にされても、売り飛ばされても何でも構いませんっ！　ですが、命だけは！　命だけはどう

かお許しをっ！」

頭を地面にこすり付けるようにしながら、半ば叫ぶように懇願するリーダーらしきゴブリン。そんな姿を見て、少女は硬い表情のままゆっくりと彼らの前に出た。そして――。

「す、すんませんしたーっ!!」

勢い良く地面に頭を叩き付けた。凄まじいまでに美しい、ジャンピング土下座であったという。

その後、ゴブリン達がおこぼれを失敬していたのは、何とケンイチが掌握した狼魔獣の群だと判明した。

ケンイチは群が狩った肉を放置しているのを目撃し、「残すのは良くない」と完食の指示をしていたのだという。そうすることにより、狩りに割く時間を短縮し、牧場の手伝いをもっとさせるという目的もあったのだとか。

ケンイチ自身、まさかこんな事態を招くとは思わなかったと、ゴブリン達に深く謝罪した。

そして、お詫びの印にと、彼らを農場で住み込みで雇うことにしたのだ。

ケンイチの農場では、魔獣の管理や移動を狼魔獣に任せていた。だが、狼魔獣達にはできないことも多い。ゴブリン達はそういった仕事――商品の出荷や配達、出産の手伝いや毛刈り、乳搾りなど――をすることになった。これにより、彼らは食い扶持と寝床、そして仕事を手に入れたのである。

ゴブリン達の体を蝕んでいた病や怪我も、すっかり癒されていた。キョウジの回復魔法は、古傷だろうが、こじらせた病だろうが関係なく一発で完治させてしまうのだ。

衣食住だけでなく、傷や病まで。ゴブリン達は、ケンイチとキョウジにとても感謝した。だが、二人にしてみれば、当たり前の行動だった。ケンイチにしてみれば借りを返しただけだし、キョウジにしてみれば役目を果たしたにすぎない。

彼らが仕事を手伝ってくれるようになり、牧場は今までよりもずっと大きくなっていた。

今までケンイチとキョウジだけだった働き手が、一気に増えたからだ。魔獣の数を増やし、供給量もグンと増えた。

それでも、肉や乳、卵は、まだまだ供給量不足だ。働き手が増えるのは、もろ手を上げて喜ぶべきことなのである。

喜ぶゴブリン達を眺めるケンイチとキョウジの頭の中には、共通する価値観があった。

困っている人を助けるのは当たり前。

この世界に来てすぐ、自分達が助けてもらったように、誰かが困っていたら手を差し伸べるのが当然だと思っているのだ。二人にしてみれば、当たり前のことをしただけなのである。

とはいえ、それが行われないのが、世の中だ。二人のこの感覚は、日本人特有のモノと言えるのかもしれない。

ゴブリン達は職場も寝床も見つけ、万々歳であったわけだが、問題はミツバである。
凄まじい腕力を発揮した、彼女のステータスには「超身体能力」とあったという。
コレのお蔭で、ミツバはゴブリン達を殴り倒せたのだそうだ。
ハンスは思わず「『にほんじん』というのは恐ろしい力を持った種族だ」と呟いた。それに対し、キョウジは半笑いを浮かべる。キョウジによると、彼らの能力は元々持ち合わせていたものではないらしい。おそらく、異世界に飛ばされたことと関係していると推測されるのだとか。
なんにしても、ミツバは本人の気性も相まって、いつ爆発するとも知れない爆弾娘と化している。
こんな少女をそこらへんの農村に預けていては、どんな惨事が起こるかわからない。
かといって、一応男所帯であるケンイチの牧場に住まわせるのもはばかられる。
結局、ミツバはハンスが預かることとなった。寝泊まりは、ハンスが使っているのと同じ宿屋だ。
立場としては、ハンスの従者、という形に落ち着いた。
本来、ハンスのような騎士は、現地で誰かしら人を雇うことを推奨されている。今までそれをしなかったのは、ハンスがバリバリ仕事をこなしていたからだ。本来なら数人がかりで取りかかるはずの仕事を、ハンスはたった一人で片付けて来たのである。その仕事の中には、大工の手伝いや、側溝の掃除なども含まれていた。
とても騎士の仕事とは思えないが、地方騎士の公務員的な側面を考えれば仕方がないだろう。こんな田舎では、あまり地位に意味はないのだ。住人達の認識では、いざというとき頼りになる肉体労働担当、程度なのである。
とはいえ、ハンスにだって肉体労働以外の仕事がある。力仕事をミツバが代わりにやれば、その分ハンスはほかの仕事ができるのだ。ミツバは自分の力を活かせ、ハンスは書類仕事に集中できる。まさに、どちらも得をする関係と言えるだろう。

一ヵ月ほど経つと、ミツバは街の人間に信頼されるようになっていった。
生まれついての人懐こい性格もあってか、あっという間に街に馴染んだ。始めはハンスの従者としてだけ扱われていたのが、いつの間にか名指しで仕事を頼まれる機会も増えていた。
道を歩けば声をかけられたり、街中の人と挨拶を交わすようになっていたのだ。
子供達と遊んだり、八百屋のおばちゃんに果物を分けてもらったり、荷物を運んでいるじいちゃんを手伝ったり。まるでずっとこの街で暮らしていたかのように、街に溶け込んでいったのである。
しかしそんな穏やかな生活の中で、ミツバの中にある疑問が生まれていた。
それはいつまでたっても解消されず、日に日に大きくなっていく。ついにそれを抑えきれなくなったミツバは、ハンスに詰め寄った。
「ハンス団長！　なんでうちの騎士団にはかっこいい名前がないんすかっ!!」
「あんまり大声出すな。あと俺は団長じゃないし、うちは騎士団でもない。ただの地方駐在所だ」
そう――。

ミツバの疑問とは、何故街の騎士団に名前がないのか、であった。
街や農村に暮らす人々は、みなハンスのことを「駐在さん」や「騎士さん」「ハンスさん」などと呼んでいる。ハンスは騎士であり、彼のもっとも重要な仕事は街や農村を守ることのはずだ。
ミツバの中では、騎士は騎士団に所属しているものという認識であった。ハンスも騎士なわけだから、騎士団に所属していないのはおかしい。にもかかわらず、騎士団そのものが存在していないとは。
ちなみに、騎士団の定義は国ごとに違い、他国には自警団というほどの練度しかない騎士団も存在する。だがハンスの住む国では、騎士とは魔法と剣を同時に使いこなすとか、剣一本でドラゴンを退治したとか、そういった単騎で高い戦闘能力を持つ人間に贈られる称号を表す。
そんな騎士達を集めた特殊部隊が、この国における騎士団なのである。ハンスはそのことを説明すればよかったのだが、残念ながら彼は自分の知る騎士団以外の騎士団を想像できなかった。
ハンスに言わせれば、「こんな貧相な騎士団があるか」といったところだろう。
だが、ミツバの感覚から言えば、騎士団というのは騎士がいて街やそこで暮らす人々を守っていれば、それだけで名乗れるものなのだ。
ミツバには何故ハンスが騎士団を名乗らないのか、どうしてもわからなかった。
何度もしつこく騎士団と名乗ろう、と提案するミツバだったが、ハンスは全く聞き入れてくれない。ハンスから見れば、ミツバは騎士団に憧れる子供のように映っていた。

あまりの相手にされないっぷりに頭に来たミツバは、悩んだ末、知り合い達に相談することにした。
彼女がハンス以外で頼りにしているのは、同じ故郷のケンイチとキョウジの二人だ。
そんな訳で、「第一回日本出身者会議」が開かれることとなったのである。

会議が始まってすぐ、ミツバとこの国の騎士団観の違いを、キョウジが説明してくれた。
治療師として様々なところを回るうち、彼はこの国や世界の知識を蓄えていたのだ。
「まあ、そんな感じですから。ハンスさんの考える騎士団っていうのは、言ってみれば超人の集まった特殊部隊みたいなものなんだよ」
「確かにこの街にはにつかわしくないっす！」
キョウジの説明に、ミツバは納得したように頷く。
「それに、ハンスさんの場合、家の事情もあるしね」
「家の事情？　ハンスさんって貧乏貴族とかじゃねぇーの？」
「それっぽいっす！」
「どういう認識なんですか二人して……」
苦笑しながら、キョウジはハンスの過去についての話を始めた。
ハンスの実家であるスエラー公爵家は、この国でもっとも有力な貴族だ。広大な領地を持ち、王

城で働く文官も多く輩出している名門なのだという。王族に妃として嫁いだものもいて、その地位は磐石なものであるのだとか。

その大貴族の家に生まれたハンスは、当主の五男坊であった。従って、家を継ぐことがまずない立場だ。それ故、彼に求められたのは、武人として活躍し家名を上げることだった。

政治家としては大きな権力を誇っていたスエラー公爵家も、軍部への影響力は未だに低い。そこで、ハンスのような家督を継がない男子を送り込み、軍部への発言力を伸ばそうとしたのだ。

そのために幼い頃より剣術や武術を叩き込まれて来たハンスは、みるみるうちに戦果を重ね出世していった。やがて一騎当千の実力者を示す騎士の称号を得、ついにはそれらを束ねる騎士団の団長にまで上り詰めたのである。

その頃についた二つ名が、「魔術師殺し」というものだ。

何人もの魔術師を、たった一人で鎮圧して来た実績から付けられたその異名は、未だに国中の騎士の間では語り草になっている。

「ハンス団長、本当に騎士団の団長だったんすか！　すごいっす！　魔術師殺しってカッコいいっす！　流石っす！　メイン騎士きたっす！　これでかつるっす！」

「勝てないよ……」

「しかし、なんでそんなすげぇ人がコンなド田舎にいんだ？」

妙な会話をしているキョウジとミツバをよそに、ケンイチは不思議そうに首を傾げる。キョウジは腕を組むと、言いづらそうに口を開いた。

「言ってしまえば、活躍しすぎたってことですかね」

「ああん？」

「どういうことっすか？」

不思議そうな顔をするケンイチとミツバに、キョウジは説明を続ける。

ハンスが騎士団長になってからしばらく経って、この国は隣国との戦争へ突入した。ハンスが率いる騎士団は、その最前線へ送り込まれた。戦果を上げさせようとしたハンスの実家が、そう仕向けたのだ。

当初、ハンスの率いる騎士団は、早々に壊滅すると思われていた。まるで使い潰そうとするかのように、激戦地ばかりへ送り込まれていたからだ。だが、その予想は大きく外れた。

転戦に次ぐ転戦にも拘らず、ハンスの率いる騎士団は生き残った。その上、戦局に影響を与える大きな戦果を挙げていったのだ。

この状況に対し危機感を抱いたのは、ハンスの実家であるスエラー公爵家だった。ハンスの名声が高まり、彼が家を乗っ取ろうとしているのではないかと疑い始めたのである。

当然、ハンスにはそんな考えは一切ない。だが、何事も疑ってかかるのが貴族という生き物だ。スエラー公爵家のハンスへの疑いは、彼の名声が大きくなるたびに強くなっていく。

そこでスエラー家は、ハンスを最後の戦場へ送り込む。軍部に、ハンスが率いる騎士団による、

敵本隊への奇襲を提案したのだ。敵の規模を考えれば、作戦の成否に拘らず生還の可能性は極めて低い無謀な作戦である。

周囲が猛反対する中、ハンスはこの作戦を承諾した。ハンスは、自分が実家から厄介者扱いされていると知っていたのだろう。

自ら死地へ赴いたハンスだったが、しかし――。

彼はその戦場から、見事に生還を果たした。しかも、敵総大将の首を取るという大戦果を挙げて。

この一戦がきっかけとなり、戦争は終結に向かう。ハンスはその功績により、国王と謁見する機会を得た。戦争でもっとも大きな武勲を挙げた者は王から願いを聞かれ、それを叶えられるのが通例だった。

スエラー公爵家が戦々恐々とする中、ハンスが願ったこと。それは、地方騎士として、のどかな田舎の風景を除けば、これといって何の面白味もないこの辺境の街へ赴任することだったのである。

「ハンスさんは家督の乗っ取りとか政局とかに、全く興味がなかったんですよ。嫌気が差してたんでしょうね。それで、わざわざこのド辺境の街に来たんだそうです。だから、余計な波風を立てるようなことはしたくないと思いますよ」

キョウジの話を聞き終わったミツバは、あんぐりと口を開けたまま固まっていた。どうやら、相当な衝撃を受けたらしい。

「そ、そんな……ハンス団長にそんな過去があったんすか！」

「ただの気のいいおにーちゃんにしか見えねぇーのになぁ。見かけによらねーわぁ」

「まあ、当人が言わないってことは、あんまりこだわってないのかもしれないけどね」

しきりに感心するケンイチとミツバに、キョウジは苦笑を浮かべる。

「人に歴史ありってやつだぁーなぁー」

「でも、ハンス団長ならわかるっす！　この間、護身術の稽古つけてもらったんすけど、自分全然敵わなかったっすもん！」

「ミツバちゃんが!?　あんなすごい怪力なのに!?」

「全然手も足も出なかったっす！」

超身体能力を持つミツバが敵わないのは、ハンスがそれ以上に優れた身体能力を備えていたから、というわけではなかった。ひとえに、経験と技術の差だ。

ハンスの持つ技は、そのほとんどが相手の力を利用するものなのである。

柔術や甲冑術と呼ばれる技術がこの世界にも存在していて、ハンスはその使い手なのだ。

「マジか。ハンスさんマジパねぇーな！」

「ほんと、すごいですよね。それでいて、あの面倒見のよさですから。ハンスさんがいなかったら、僕、今頃、治療師なんてできてなかったですし。もともと、ただの学生ですから」

「俺もだなぁ。実家の酪農手伝ってただけだしよぉー。それが今じゃ、一国一城の主だもんなぁ」

キョウジに続いて、ケンイチもしみじみとした口調で言う。

「うっす！　自分も今みたいなことはできなかったっす！　自分、体使うしかできないっすから！」
「そういえばミツバちゃんって、陸上部なんだっけ？」
ミツバは元気良く頷くと、キョウジに向き直る。
「そうっす！　朝自主練で走ってたら、女の子が車道に飛び出して、車にひかれそうになってたんす！　自分は慌てて飛び出して、女の子を突き飛ばしたんすよ！」
「ええ!?　転生パターンなの!?」
「勢いよく突っ込んだせいで自分も道路の反対側に吹っ飛んだから、車にはひかれなかったんすけどね！　危ないところだったっす！　それでほっとしてたら、いつの間にか山の中にいたんすよ！」
「紛らわしいっ！」
サブカルチャーに毒されているキョウジには、なかなか掟破りな展開だったらしい。
「まあ、ともかく。ハンスさんは目立つのは嫌がるんじゃないかな。事情が事情だけにね」
「じゃあ、騎士団はよくないっすかね？」
「だろうね。ハンスさんは、ご実家を刺激したくないだろうし。騎士団、なんて名乗ろうものなら、実力行使で家督を奪おうと考えてるんじゃないか、なんてことになりかねないからね」
難しい顔をするミツバに、キョウジは大きく頷いて答える。しばらく考えた後、「でも」と言葉を続けた。
「自警団ぐらいはあってもいいんじゃないかなぁ、とは思うけどね」

立ち読みサンプル
はここまで

「じけーだん？　んなもんなくても、ハンスさんがいるんだから、へーきなんじゃねぇーの？」
「それなんですよ。ハンスさん、この辺り一帯一人で警備してるんですよね。それがそもそもおかしいんですよ」
キョウジの言葉に、ケンイチは良くわからないといった様子で首をひねる。隣にいるミツバはなにやらわかったような様子で大きく頷くと、元気良く声を上げた。
「つまり、すごいってことっすね!!」
「いやいや。すごいとかじゃなくてね……。いくらこの辺が田舎街だからって、かなり広い範囲をハンスさん一人で見回りしているから、休む時間もないんですよ」
「んだべなぁ。言われてみりゃ、休んでるとこ見たことねぇぞ」
「うっす！　休みなんて実際ないっす！　ここ数ヵ月一日も休まず働いてるっす！」
ケンイチはすでに何ヵ月もこの街に暮らしていて、ミツバは四六時中ハンスと一緒にいる。この二人が休んでいるところを見ていないというのだから、実際休んでいないのだろう。二人の答えを聞き、キョウジは深刻そうな顔を作る。
「僕達が来るずっと前から休んでないらしいんですよね。このままだと、ハンスさん、過労死するんじゃないですかね？　いくらミツバちゃんが来て仕事減ったとはいえ」
ケンイチとミツバは、キョウジの言葉に表情を凍りつかせた。
はたして過労死というのは、大げさだろうか。人間は、自分の限界を超えて働き続けることので